寄 稿

「風工学の今後」－ 日本風工学会名誉会員に推挙されて "Future of Wind Engineering" -On the Nomination for a Honorary Member of JAWE

松本 勝*

Masaru MATSUMOTO

このたび日本風工学会名誉会員に推挙され東京理科大学で開催された平成 23 年度日本風工学会総会において承認されたこと、大変光栄であり、うれしい限りです。河井会長(当時)をはじめ理事会の皆さん、会員の皆様にお礼申し上げます。

振り返ってみますと、現在の日本風工学会は(当時は日本風工学会研究会だったと記憶していますが)に京大の防災研究所でその設立に向けた集まり私も参加しました。その場で故石崎滄男先生が初代研究会会長に選出されたのを覚えております。其の後研究会は、日本風工学会と名称が変わり、法人化され現在に至っております。発足当時から長年にわたり風工学会には関係しておりましたことから日本風工学会の名誉会員にご推挙いただいたものと思います。今後日本風工学会の名誉のためにどれだけの貢献ができるは甚だ自信はありませんが、少なくとも名誉会員にはならないよう注意したいとお思います。

名誉会員に推挙されたことで原稿を出すように依頼された機会に、最近風工学の今後についての私見を記したいと思います。

昭和 41 年に 4 回生研究室配属で橋梁研究室(故小西一郎教授)に配属されて以来、風工学の研究に従事してきましたから、約 50 年近く風工学に関係していることになります。数多くの風洞実験を手掛け、いろんな現象を目の当たりにして風工学の面白さ、難しさを知ることができたことはよかったと思います。自分の性格によるものと思いますが、難しい不可解な現象に出くわすと自分なり

に納得できる説明ができるまで、ああでもないこうでもないと考えなければ気が済まないことが、今の自分の知識の原点になっていると思います。また修士・博士課程の学生および助手の時代信じられないくらいの数の風洞実験を行いまたそれから得られたデータの整理・解析をやりました。多くの減少を自分の目で確かめられたことや、思いもかけない現象に巡り合えることもできました。この期間来る日も来る日も風洞実験室で過ごしたことで良く覚えております。ある意味では大変つらい時でしたが、今振り返りますとこの時の経験が、複雑な現象を理解するには役立っていると思います。若い人たちは、実験を避け、計算機で処理する傾向があります。つまり **hard** を避け、**soft** に流れる傾向がありますが、それは決して良いことではありません。自分自身で実験を行うことは絶対に必要と思います。実際に生じる現象を自分の目で確かめることは必要です。実験やデータ整理は大変な作業ですが、それらを通して、自分は何を何のためにやろうとしているのかを明確に意識して、今までよく知られていなかった現象を自分なりに明らかにすることで、自信と貴重な経験さらには、問題設定とその解決という一つの物語を完結させることができるのです。これらは、言うまでもなく研究者としてあるいは技術者にとって必要不可欠なものといえます。

多くの人が、最近風工学の今後の方向について、ある種の閉塞感・行き詰まりを感じていると思います。かつては、いろんな風工学に関する未解決の問題が山積されており、また巨大プロジェクトもあって風工学にスポットライトが当たっていましたことから、多くの人たちは、

* 京都大学 名誉教授
Professor Emeritus, Kyoto University

目を輝かして実験、解析などに積極的に取り組みました。ところが時が流れ、多くの研究者によって未解決な問題も次第に解明され(?), また巨大プロジェクトも激減した現在、これからの研究・技術の展開をどうするのかという声はよく耳にします。こんな時だからこそ、総合工学への展開を図るべきでしょう。建築・土木・機械あるいは気象といったそれぞれの専門分野に閉じこもらずにもっと学際的な分野に翼を広げる良い機会ととらえることが大切だと思います。

最近、わたしは、機械学会・航空工学の国際会議によく参加します。風工学で培った知識と他分野のそれとはどのような共通点があるのか、あるいは違いがあるのかに興味を覚えたからです。その結果、流体・構造体の干渉に関して精緻に研究するという点で、風工学とは違った側面から、多くのことを学ぶことが多いですが、全体を総合的にとらえるという点で不満や違和感あるいは戸惑いを感じることがあります。しかしながらまぎれもなく知的好奇心をそそられるのは事実です。分野を超えたこれらの知識・知見を従来の分野に加えて総合化することにより新しい知見や発見があるものと信じております。そのためには、基礎知識をしっかりとっておくことは絶対に必要です。風工学の基礎知識は、関連する工学分野が広い分、他分野にもどんどん応用されるべきと考えております。逆に言えば、風工学会会員の皆さんは関連する他分野の基礎知識を学ぶべきだと思います。風工学会からの巣立ちとも言えるでしょう。そのことが明日の新しい風工学会の創生につながると思います。

皆さんの今後の大いなる挑戦を期待しております。日本風工学の未来は若い皆さんの双肩にかかっているのですから。

平成 24 年 8 月